

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）
「認知症のための縦断型連携パスを用いた医療と介護の連携に関する研究」
分担研究報告書

研究分担者 釜江（繁信）和恵（所属名）公益財団法人浅香山病院

研究要旨 平成 24 年度に作成し、配布運用した「あんしん受診手帳」（以下「手帳」）を利用した者で、平成 26 年 12 月 1 日までに施設入所に至った者を追跡調査し、施設で「手帳」がどのように役立ったかを調査した。

A. 研究目的

平成 24 年度に作成し、配布運用を開始した「あんしん受診手帳」（以下「手帳」）の利用者の内、施設入所にいった者を調査し、「手帳」の施設への受け渡し有無等調査し、「手帳」を利用することによる認知症医療と介護の連携における効果を検証する。

B. 研究方法

平成 24 年度（11 月～3 月）に公益財団法人浅香山病院精神科・認知症疾患医療センターで認知症の鑑別診断を受けた 150 名の本人または主介護者に「手帳」を配布した。配布した主介護者に対して、平成 26 年 12 月 1 日までに施設入所しているかを調査した。施設入所に至ったことが確認された者については、「手帳」を施設提示したか否か、提示した者については、施設に受け取った「手帳」に対する感想についてのアンケートを行った。

（倫理面への配慮）

本研究は公益財団法人浅香山病院の倫理委員会の承認を得て実施した。アンケートを行うことは「手帳」配布時に本人および介護家族に同意を得て行った。

C. 研究結果

「手帳」を配布した 150 名のうち入所に至ったことが確認されたのは 14 名であった。内訳はグループホーム 7 名、特別養護老人ホーム 3 名、老

人保健施設 4 名であった。その内、「手帳」を施設に提示の者は 10 名（グループホーム 6 名、特別養護老人ホーム 3 名、老人保健施設 1 名）であった。「手帳」を持ち込んだ者は、配偶者 4 名、子 5 名、ケアマネージャー 1 名であった。持ち込んだ配偶者の平均年齢は 73.5 歳、子の平均年齢は 48.0 歳であった。持ち込まれなかった主介護者の平均年齢は 83.3 歳であった。

持ち込まれた施設では、10 施設全てで入所時の情報として役に立ったと回答した。

次に具体的どのような項目が役に立ったかを聴取した（複数回答）。介護サービス利用状況（P 9）：4 件、関わっている人一覧（P 11、12）：8 件、かかりつけの医療機関（P 13）：8 件、認知症機能評価スケール（P 15）：3 件、認知症診断名（P 15）：10 件、お薬情報（P 16）：5 件、検査データ（P 19、20）：5 件、診療情報提供書：5 件、連絡ノート（P 21、22、23）：6 件、その他：0 件であった。

次に具体的にどのようなことがケアの役に立ったかを聴取した。疾患名が分かったことでケアの役に立った：8 件、お薬情報が分かったことで薬剤調整の役に立った：5 件、認知機能検査、画像検査の結果が分かったことでケアの役に立った：3 件、ノート記載で経過が分かったことでケアの役に立った：10 件、かかりつけ医や介護事業所担当者、家族の情報がケアの役に立った：6 件、その他：0 件であった。

追加したほうが良いと思われる情報があるかに

については、「認知症が初期の頃に、本人が進行した時に受けたいケア内容の希望や、延命治療の希望の有無を記載する項目」：3件、「入院治療を行ったことがある場合に治療内容についての記載できる項目」：1件があった。

不要だと感じた項目は、どの施設からも「ない」という回答であった。

今後すべての認知症患者にあんしん受診手帳が必要だと思うかには、すべてに必要なと思う：6件、すべてではないが必要なと思う：4件、必要ではない：0件であった。

そのほか工夫するべき点などがないかについては、お薬情報が最新のものに更新されていなかったという意見が1件あった。

D．考察

主介護者が高齢であると、「手帳」が施設へ持ち込まれない傾向がみられた。確実に施設入所時に「手帳」が施設に渡るようにするには、主介護者が高齢の場合の「手帳」の管理が問題になると考えられた。1名は単身生活者であったが、ケアマネージャーが「手帳」管理していたため、入所の際に持ち込まれた。入所時に「手帳」が持ち込まれた場合は、「手帳」の存在が入所後のケアに役に立っていることが明らかになった。特に認知症診断名、かかりつけの医療機関、関わっている人一覧が役に立ったようであった。具体的にどのようなことがケアの役に立ったかでは、ノート記載で経過が分かったことでケアの役に立ったという意見が10施設全てで認められた。進行期に入所するケースが多いため、それまでどのような経過をたどって入所に至ったのかを知りたいという希望が強く聞かれた。また看取りまで行っている施設では、「手帳」から、認知症が初期の頃に本人が今後の受けたいケアについてどのように考えていたか知ることができれば、「手帳」を終末期のケアに役立てられると考えていることがわかった。

E．結論

入所先の施設も「あんしん受診手帳」が入所後のケアに役立つと感じていた。しかし、「あんしん受診手帳」を初期から切れ目無く使用し、入所時に確実に施設へ持ち込まれるようにするには、誰が「手調」を管理するのが最適かを再考する必要があると考えられた。また、認知症が初期のうちに本人の今後のケアに対する希望を示すことができるような内容を追加するか検討を要すると考えられた。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1.論文発表

Nonaka T, Suto S, Yamakawa M, Shigenobu K, Makimoto K. Quantitative evaluation of changes in the clock-watching behavior of a patient with semantic dementia. Am J Alzheimers Dis Other Demen. 2014 Sep;29(6):540-547.

Yamakawa M, Yoshida Y, Higami Y, Shigenobu K, Makimoto K. Caring for early-onset dementia with excessive wandering of over 30 kilometres per day: a case report. Psychogeriatrics. 2014 Dec;14(4):255-260.

繁信和恵．認知症の言語症状の診方と代表的徴候．老年精神医学雑誌．2014；25：32-36．

繁信和恵．認知症患者の退院へ向けた連携(前半)．精神科看護．2014；41(1)：70-78．

繁信和恵．認知症患者の退院へ向けた連携(後半)．精神科看護．2014；41(2)：72-79．

2.学会発表

繁信和恵．前頭側頭葉変性症のケア．第15回日

本認知症ケア学会大会, 2014. 5. 31-6.1 東京. 口頭発表

H . 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1.特許取得

なし。

2.実用新案登録

なし。

3.その他

なし。